

令和7年度 石川県立金沢北陵高等学校 第29回卒業証書授与式 式辞

春を告げるやわらかな日差しが校舎を包み、木々の芽吹きが新たな季節の訪れを知らせる今日このよき日に、ご来賓の皆さま、ならびに多くの保護者の皆さまのご臨席を賜り、石川県立金沢北陵高等学校第29回卒業証書授与式を挙げていただけますことは、誠に大きな喜びであります。心より御礼申し上げます。

只今、卒業証書を授与しました171名の卒業生の皆さん、卒業おめでとうございます。壇上から見る皆さんの表情には、この3年間の努力と成長の歩みが確かに刻まれており、その誇らしい姿に、胸が熱くなりました。

振り返れば、この3年間は喜びだけでなく、忘れがたい試練にも向き合った日々でした。その象徴が、令和6年1月1日の能登半島地震です。テレビや新聞に映し出された被災地の光景、そして本校周辺の地盤や住宅の損壊。さらに、皆さんが毎日歩いた通学路—あのW坂が崩れ、その姿を失ってしまったことは、私たちの心に深く刻まれています。あたり前のように思っていた日常が、どれほど尊いものであったのかを、私たちは痛感させられました。

しかし、そんな中で見せてくれた皆さんの姿こそ、本校が大切にしてきた「不撓不屈」の精神そのものでした。慣れない迂回路での通学に不安を抱えながらも、前を向き、一歩ずつ歩み続けた皆さん。その姿は、困難にあっても決して立ち止まらない強さを私たちに示してくれました。

この強さは、日々の学校生活の中でも育まれてきました。

文化祭では、準備の段階から試行錯誤が続き、思い通りに進まないこともあったでしょう。しかし、本番が近づくにつれ自然と役割を分担し、互いを支え合う姿が見られました。ステージが幕を開けた瞬間の安堵や、模擬店で忙しさを笑顔に変えていく皆さんの姿は、まさに成長を感じさせる姿でした。

球技大会では、勝ち負け以上にクラスの絆が深まっていくのを感じました。仲間のミスに「大丈夫！」と声をかけ、苦しい場面で自然に生まれた応援。体育館いっぱいに広がったあの温かな一体感は、今思い返しても心を打ちます。

また部活動では、早朝の練習や放課後の自主トレーニングなど、日々の積み重ねが皆さんの力となりました。喜びも悔しさも、仲間と分かち合いながら乗り越えてきた経験は、これからの人生で必ず大きな支えとなるはずです。

校歌にある「むつみ拓く 真実たしかめ」の歌詞のように、皆さんは仲間と語り合い、自分と向き合い、互いを思いやる心を育んできました。また、「熱いきづなは世界のそらへ」の言葉どおり、様々なボランティア活動や地域貢献活動にも積極的

に取り組み、誰かのために行動できる力を身につけました。

そして今、皆さんは「新しい扉あける 清響き」の瞬間に立っています。その扉は、自ら考え、判断して開ける扉です。どの扉を開けるべきか、迷うこともあるでしょう。しかし、勇気をもって一歩を踏み出せば、必ず開く扉です。例え開くまでに時間がかかったとしても、それは皆さんが自分の未来を真剣に選び考えている証なのです。

これからの道のりには、悩む日も、立ち止まる日もあるでしょう。しかし、北陵での三年間で学んだことは、困難を前にして必要なのは「完璧な答え」ではなく、「まずやってみる」勇気だということです。仲間と励まし合いながら挑戦してきた経験こそ、これからの人生の大きな財産となります。

先日開催されたミラノ・コルティナ冬季オリンピックでは、倒れても挑戦をやめないアスリートたちの姿が世界に感動を与えました。皆さんもまた、日々の学びの中で自分と向き合い、歩みを止めずに成長してきました。どうかこれからも、ここで培った勇気と前向きな姿勢を胸に、大きな世界へ堂々と羽ばたいていってください。

最後に、保護者の皆さま。これまでお子さまを支え、励まし続けてくださったことに心より感謝申し上げます。皆さまの温かな愛情があったからこそ、今日の晴れの日を迎えることができました。どうかこれからも変わらぬ眼差しで、彼らの新たな旅立ちを見守っていただければ幸いです。

卒業生の皆さん。北陵で過ごした日々と、仲間との絆を大切にしながら、自分を信じ、未来へと力強く歩み続けてください。

皆さんの人生が希望と輝きに満ちたものとなることを心よりお祈りし、式辞といたします。

令和8年3月3日

石川県立金沢北陵高等学校

校長 浅尾 幸代